

# 老齡犬の脳に見られた壊死性病変の病理発生

島田 章則、森田 剛仁、日笠 喜朗<sup>1)</sup>  
(鳥取大 農 獣医病理、<sup>1)</sup>同 獣医内科)

ヒトの老年性痴呆の原因として、感染症、中毒、腫瘍、脳血管障害、アルツハイマー病を含む変性性疾患などがある。イヌにおいても高齢化が進行し、痴呆様症状を示す老齡症例が増えてきている。

神経症状を呈した症例のこれまでの病理検索の結果、脳に壊死巣を有すイヌが多数存在した。脳の壊死巣形成の原因として、一般に、循環障害、感染症、栄養障害および腫瘍による脳組織圧迫などがある。このうち、循環障害の原因として血流障害、血液性状の異常および血管壁の異常(奇形、動脈硬化等)が考えられる。

今回、イヌの脳に見られた壊死巣を病理学的に分類し、血管病変との関連について検索した。

## 【材料と方法】

脳に壊死巣が見られた犬12症例(11ヶ月～16歳8ヶ月)について、病変の質並びに分布を検索した。そのうち、梗塞性病変を有していた老齡犬の血管病変について組織化学的(アザン染色、PAS染色、脂肪染色)並びに免疫組織学的(アミロイド、筋アクチン)検索を行った。

## 【結果・考察】

12症例の壊死巣は、梗塞(6例)、炎症(5例)、原因不明の急性神経細胞壊死(1例)に分類された。梗塞性病変はすべて老齡犬に見られ、そのうち5例は血中コレステロール値の上昇を伴っていた。梗塞性病変6例中、5例には硝子血栓(4例)および再疎通を伴う器質化血栓(1例)の形成が見られた。明らかな血栓形成の認められなかった1例にのみ、粥状硬化症を示唆する血管病変が認められ、それは高度のコレステロール血症を伴っていた。梗塞巣の大きさおよび分布は、大血管の閉塞による広範囲の梗塞から細小血管の閉塞による多発性小梗塞まで多岐にわたっていた。

以上より、1)老齡犬の脳の壊死巣の主な原因は循環障害(梗塞)であること、2)その背景として血液性状の異常に基づく血栓症が多いことが示唆された。

伴侶動物の高齡化が進む中で、ヒトと同様に、脳の梗塞性病変を背景とする寝たきり症例が増加することが予想され、その予防や治療方法を検討することが必要と思われる。